

東海学院大学・東海学院大学短期大学部公開講座 2022

「しなやかに生きる ～大学は知の宝庫～」

第7回 12/15 (木) 13:30～15:00 報告

ショスタコーヴィチ最後の交響曲を聴く

講師 菅野 道雄 (本学教授)

於：図書館大セミナー室

◆◆◆◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*

令和4年度第7回公開講座(受講者39名)が12月15日に本学図書館大セミナー室で開催されました。

今回の講師である人間関係学部子ども発達学科の菅野道雄先生は、本公開講座の講師を2016年度から続けて下さっており、毎回好評な講座で楽しみにしているとおっしゃる声をお聞きします。今回も全7回講座の最終回で多くの方々が熱心に学ばれました。

菅野先生は、音楽を専門とされ、文部科学省の検定教科書なども執筆されています。本学では「音楽科指導法」「子ども音楽療育」関連科目、教養科目「音楽」などを学生に教授され、小学校や幼稚園教諭をはじめとした教師・専門職の養成にも携わっておられます。

今回の「ショスタコーヴィチ最後の交響曲を聴く」と題された講演は、旧ソ連の体制下で、幾度となく批判を受けながら復活し、20世紀最大の交響曲作家となったショスタコーヴィチにスポットをあてたものでした。

ショスタコーヴィチ(1906～1975)は、旧ソ連を代表する作曲家であり、20世紀最大の交響曲作家のひとりです。18歳の時にサンクトペテルブルク音楽院の卒業作品として交響曲第1番を作曲し、1971年の最後の交響曲まで15曲の交響曲を残しました。

しかし、その作曲生活は順風満帆だったわけではなく、1936年には共産党機関紙「プラウダ」に、歌劇「ムツェンスク郡のマクベス夫人」とバレエ「明るい小川」を批判する社説が掲載されました。これは、レーニンに替り権力を握ったスターリンが、「社会主義国家建設にふさわしい、民族主義的な音楽」を作曲することを作曲家たちに求めたことによるもので、この「プラウダ批判」を乗り越えるため、政府が求める社会主義を賛美する内容である「社会主義リアリズム」の路線に従った作品を書き続けたということです。

また、第2次大戦後、戦争の勝利を祝うために作曲した交響曲第9番は、壮大な作品を期待した当局に失望を与え、1948年には、「ジダーノフ批判」が起きました。これは、文化、芸術に対するイデオロギーの統制であり、国内の多くの作曲家が批判の対象となり、プロコフィエフやカバレフスキーらも公職から追われたそうです。ショスタコーヴィチは、名誉回復のため、オラトリオ「森の歌」など、社会主義リアリズム色の強い作品を書いて当局に迎合する一方、交響曲は、スターリンが死ぬ1953年まで書かれなかったそうです。

その後は、「雪解け」の時代となり、それまで封印してきた交響曲第4番の初演や、13番、14番といった大作の交響曲が書き進められてきたことが示されました。

今回 DVD で鑑賞した「ショスタコーヴィチ最後の交響曲」は第 15 番になります。病気がちになっていたショスタコーヴィチが、自らの子ども時代からの人生を振り返るものとなっているともいわれ、息子であるマクシム・ショスタコーヴィチは、指揮者として、父親の交響曲第 15 番の初演(1972)を指揮したそうです。この交響曲は、13・14 番が声楽付きの大規模な交響曲だったのに対して、古典的な 4 楽章の 2 管編成のオーケストラのための作品になっていることが説明されました。各楽章には様々な作曲家の作品引用があり、第 1 楽章は Allegretto で、ロッシーニの「ウィリアムテル序曲」の行進曲が繰り返し登場し、第 4 楽章は Adagio-Allegretto で、ヴァークナーのいくつかの作品のメロディが出て来るとのことでした。

ミヒャエル・ザンデルリンクの指揮するドレスデン・フィルハーモニーの演奏を鑑賞しましたが、ショスタコーヴィチが生きた時代の中での芸術について、戦争によるドレスデンの劇場の変遷なども話され、作品の背景などを深く考えながら鑑賞できるきっかけとなりました。打楽器が多く使用され、非常に印象に残る楽曲で、講座を聞きに来られた方々も多くを感じ取られた貴重なお時間だったようで、熱心に鑑賞されていました。

受講後の質疑応答では、「ショスタコーヴィチがこの交響曲第 15 番をイ長調とした理由」が質問されました。その問いに対して菅野先生は、私たちにも理解しやすいように、この作品には、他作曲家の作品引用や、自作の交響曲第 4 番の引用など、自身の音楽的回想とした交響曲でもあることを話されました。また、ショスタコーヴィチの音楽は調性的でありながら、無調的な主題を用いることも多く、十二音技法を自由に使った音列技法などを用いたりしていることも解説され、A の音が一番基本的な音であることも学びました。

菅野先生は、「ロシアによるウクライナ侵攻があり、プーチンとスターリンがなぜか重なって見えてしまい、すぐにショスタコーヴィチを思い浮かべた」また、「しなやかさというのは、曲げても折れずにまた戻るような柔軟さ、それは簡単には屈服しないしたたかさでもあるように思います」とおっしゃいました。先生の講義から当時の社会情勢、そして、現在の世界平和を考えるものとなり、年末の最終回講座として、深く考える時間となった講座でした。

【講座の様子】

